

ひなまつりと共に長崎街道の歴史も併せて楽しむことができます。「長崎街道ひなまつり 木屋瀬宿」立場茶屋銀杏屋」は、今年で10回目の開催となります。旧長崎街道沿い観光文化施設4館連携による、おひなさまやそれに関連する展示を行うイベントです。4施設それぞれが違った雰囲気を出しており、長崎街道の歴史も併せて楽しむことができますので、木屋瀬の古い町並みを散策しながらの施設めぐりをこの期間に行ってみてはいかがでしょうか。



【北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館】
【旧高崎家住宅(伊馬春部生家)】



総合問い合わせ先
長崎街道
木屋瀬宿記念館
093
619-1149

企画展「長崎街道筑前六宿のイベント」
みちの郷土史料館にて、企画展「長崎街道筑前六宿ひざくりげ」今に伝える宿場の魅力」を令和3年10月30日(土)～12月19日(日)まで開催いたしました。
「筑前六宿」とは、黒崎宿から当館の所在地である木屋瀬を含む原田宿までの6つの宿場町を指し、筑前国でも特に通行量の多かった宿場町として、江戸時代に最盛期を迎えます。本展は、そんな筑前六宿と大里宿、長崎街道の起点である小倉「常盤橋」の特徴と魅力を伝えることを目的に展示を行いました。
企画展開催にあたり、来館者応募企画の賞品を快くご提供いただきました入江製菓株式会社をはじめ、地域の方々にも多大なるご尽力を賜りました。この場をお借りして、ご協力いただきました全ての方々に厚くお礼申し上げます。



企画展「長崎街道筑前六宿のイベント」

今回は、響ホール室内合奏団メンバーによる弦楽四重奏のプログラムで、ヴィヴァルディの「春」やヨハン・シュトラウスIIの「美しく青きドナウ」など、新春にふさわしい曲目が演奏されました。
新型コロナウイルス感染防止の観点から、入場者数を抑えての開催となりましたが、それでも約100名の御来場の皆様は、弦アンサンブルの美しい調べを心から楽しんで見受けられました。
アンコールは、ニューイヤーカー恒例のラデッキー行進曲で、会場皆さんも手拍子で参加し、大いに盛り上がりました。



1月23日(日)、こやのせ座において10回目となるニューイヤーカーコンサートが開催されました。
今回は、響ホール室内合奏団メンバーによる弦楽四重奏のプログラムで、ヴィヴァルディの「春」やヨハン・シュトラウスIIの「美しく青きドナウ」など、新春にふさわしい曲目が演奏されました。

江戸時代末期の宿場建築の様相を残す建物が貴重であることから、市の文化財にも指定され一般公開されています。期間中は約600体のひな人形が展示され、趣ある建物と併せて来館者を楽しませてくれます。

江戸あかりの民藝館

館長である佐藤伸一さんが収集された、江戸時代の大名家や武家由来のひな道具を展示します。またそのひな道具は、実物の道具を作る職人たちが製作しているため、非常に精巧な仕上げりなのも特徴です。江戸あかりの民藝館で、貴重なひな道具の数々をお楽しみください。

立場茶屋銀杏屋

「大名びな」と呼ばれる手作りの巨大びなや、色とりどりのさげもんで書院造の上段の間が飾り付けられます。また、表には小さく可愛らしい竹びなが並び、来館者を歓迎します。

寄せ太鼓

長崎街道
木屋瀬宿
立場茶屋銀杏屋
〒807-1261
長崎県長崎市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

ひなまつり

3月27日(日)まで開催中
※立場茶屋銀杏屋は3月13日(日)まで

「長崎街道木屋瀬宿記念館」
みちの郷土史料館 企画展示室にてひな人形の歴史などを紹介するとともに、天保時代に制作された「天保びな」や、北九州市在住の人形作家の作品なども展示いたします。まずはみちの郷土史料館に訪れ、ひなまつりや長崎街道の豆知識を携えて他施設を巡ってみてはいかがでしょうか。

筑前木屋瀬 第13回
今昔歳事記

紅屋泰助氏(故柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳事記」の第13回目です。今回は、「ひろば北九州」平成22年10月号の行事・風物について、後編としてご紹介させていただきます。

扇天満宮観月会
句会や心尽くしの賄い接待

次に、十三夜・栗の名月の宵に行われる「扇天満宮観月会」をご紹介します。

これは、連歌師飯尾宗祇の当地来訪故事を名称由来とする扇天満宮に宿驛往時から伝わる行事です。数寄者たちが十三夜の月を愛でつつ酒を酌み交わす合間に「送り笠」にて俳諧を楽しんでいたと伝え聞いて居ります。

当時の木屋瀬住民の文化薫る川筋気風が偲べれます。此の伝統は、地方俳人阿部王樹門下の岩尾金樽・不彫兄弟や梅本梅石居ら当地の文化的先人たちが健在なりし昭和頃まで

は続いていました。しかし、其の後暫く途絶えていたのを、当世の数寄者連中(筑前木驛・茶目氣一輪)が継承復活し、現在に至って居ります。尚、復活後は、阿部王樹門下を中心として色んな俳句結社の方々にも声を掛け、新聞広報でも俳句を一般公募するなど、句会を主体とする格調に月見の宴を併せて執り行い、参加者には好評でございました。然しながら、句会主体の観月会では参会者が限られる木屋瀬の現状から、此処数年は地域の方々に「誰しも気兼ねなくひろく親しんで戴く」事を優先し、観月会を執り行なって居ります。

扇天満宮観月会復活の初志である「木屋瀬の伝統文化行事の継承」が拙くも実現叶った今、「歴史的文化財産を活かした地域文化の向上」を次なる課題として、先ずは俳句に親しむ土壌づくりに向けて取り組んで居る処でございます。何れの日にか扇天満宮観月会が文化的情緒に満ちた、地域を挙げての観月句会へと発展する事を、私たちは夢見て居るのでございます。

つづく(記念館)

いろいろはかるたのご紹介

飯尾宗祇(1421~1502)は室町時代の連歌師。著書『筑紫道記』によると、木屋瀬宿で天神から扇を賜る夢を見た。その後、太宰府に赴き、実際に扇を貰ったので「正夢であった」と記す。この故事から「扇天満宮」と呼ばれ、毎年、宗祇の来訪時にあわせ、十三夜の観月句会が執り行われる。尚、扇天満宮の名称は日本唯一と聞いて居ります。



木屋瀬宿記念館収蔵品紹介 追分道標

江戸時代初期に参勤交代制度が成立し、木屋瀬の村が宿場町として一気に栄えた一つの要因として、小倉から長崎を結ぶ「長崎街道」と、小倉から唐津を結ぶ「唐津街道」との分かれ道の起点となる宿だったことが挙げられます。そして木屋瀬宿を通過する旅人が迷わないよう、分かれ道の道しるべとして建てられたのがこの追分道標(おいわけどうひょう)です。
この追分道標は元文3年(1738年)に作られ、石には「従是(これより)右赤間道 左飯塚道」と記されており、右に行くと遠賀川・犬鳴川を渡って植木に上がり、赤間道は博多へ行く道へ。左へ行くと飯塚方面へ行く道、つまり長崎街道へと通じていました。
しかしこの道標は、長年の風雨に晒されたことによる激しい劣化や、交通事故で道標の下部が破損するなど、様々な理由から元あった場所を離れることとなり、みちの郷土史料館の常設展示物として保存されています。現在、道標があった場所にはレプリカが設置されています。
江戸時代から数多くの旅人や激動の時代の流れを見守ってきた追分道標も、今では木屋瀬宿記念館に来館する人々を見守り続けながら静かに歴史を物語っています。



追分道標画像 表・裏

(長崎街道木屋瀬宿記念館 学芸員 加藤 悠)

シリーズ 文化の薫る町木屋瀬

第四回 木屋瀬の町並みと伊馬春部

令和三年十二月、木屋瀬の伝統行事である子供多びす祭りが古式に則り行われ、御神行、笹山笠の運行等、盛大に執り行われました。頭（かしら）の名前も紅白の幕に十名記載されていきました。一期時は頭（かしら）の人数が少なく開催の継続が心配された時期もありましたが、関係者のご努力のおかげで今日盛大に開催されることに七十年前に頭を経験したものと感謝に絶えません。木屋瀬の文化の継続の姿が此処にあるようです。昨今、木屋瀬の祭りや街並みの見学に他所から来られる人達が多数居られますが、私たち住民が普段何気なく見ている瓦葺きの家々に他所でない魅力を感じられるようです。



伊馬春部邸 (旧高崎家住宅邸)



回転式雨戸 (江戸の知恵)

町として、また川船の物流拠点として栄え、明治以後は石炭景気の影響を多大に受け、街並みにもその文化が残っています。街道には江戸時代に建築された家や、明治、大正とその時代時代を代表する家々が残り、文化が脈々と続いているのが感ぜられます。まさに木屋瀬の街並みは文化です。その文化を守るべく北九州市で唯一歴史的景観地域に指定され、街並みの保存と創造を住民と行政が一体となり進めています。

さて、木屋瀬宿の西構口近くに、旧高崎家住宅（通称伊馬春部生家）があります。高崎家は天井の墨書名から1835年に建てられたものと判明し、北九州市で初めての民家の有形文化財として登録されました。高崎家は、木屋瀬の江戸時代を代表する大商家で、職業は板場（櫛蠟業）です。櫛の実を絞って油を取り、行燈や蠟燭の材料、髪油などの需要に対応していたのです。屋号を柏屋（カネタマ）と称していました。歌人である伊馬春部氏の生家でもあります。管理が

来ず地域の町内会に家を寄贈されました。町内会もこの貴重な建物の活性化に苦慮し北九州市に譲り渡しました。市では総事業費二億三千万円をかけて建築当時の建物として復元しました。屋内には伊馬春部氏が使用した机やカメラ、脚本の原本や自筆の歌等が展示され、また各地の学校から依頼され作詞した校歌など、その業績が分かるように展示されています。伊馬春部氏は、昭和五十一年には宮中歌会始の召人を拝命しています。旧高崎家住宅は木屋瀬の文化のシンボルの存在として光を放っています。



伊馬春部氏

昭和五十一年 宮中歌会始召人として詠まれし詞 お題『坂』
ふりかえりふりかえりみる坂のうえ
吾子はしきりに手をふりており
春部
梅田和江戸の香残る本屋の関
初つばめ長崎街道夢駆ける
本町 野口靖彦

第20回 木屋瀬芸術祭 開催に向けて

今年の芸術祭の開催につきましては、新型コロナウイルスの感染状況に注視しつつ、「コロナ禍であっても通常通り開催いたしました昨年のように、準備は進めてまいりたいと考えております。

つきましては、地域の皆様を取り組んでいただく行事や、文化芸術に関するイベントなども予定しておりますので、実施に向けてご検討をお願い申し上げます。

○開催日(予定)

- 5月3日 火・憲法記念日
- 4日 水・みどりの日
- 5日 木・こどもの日

木屋瀬いろは歌留多大会中止について

木屋瀬いろは歌留多大会は、1月9日(日)に「こやのせ座」にて開催予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、昨年度に引き続き中止の決定を行いました。

木屋瀬の文化と伝統が織り込まれた歌留多を次世代へ引き継いでゆく、価値のあるイベントを2年連続で中止することは大変心苦しいことではございますが、次回開催の際は多くの皆様に参加していただきますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

宿駅木屋瀬

京都より太宰府までの道を大路と呼び、国内で一番重要な道であった。この大路が木屋瀬の町部を貫いているが、大路と呼ばれる道はこの一帯だけであった。今の東海道と東山道の二道が中路と呼ばれ、その他の道は小路と呼ばれていた。

一三四五年前の大化元年のクーデターにより蘇我氏が滅亡した。それからの政り事は、天智天皇、天武天皇代を主軸に次々に改められていった。この大改革を大化の改新と呼んでいるが、その中で大宝律令と養老令も定められ、この律令に従い、前記の道路の必要な場所の集落に宿駅が定められた。これは公用の旅をする人達の便利を計る事が主目的であったが、一般の人々の交流や、集落の発展の上に大きな期待がもたれる事でもあった。

木屋瀬には国内一道の大路が貫通しているの、律令施行と同時に宿駅になっている。宿駅の制度は、先ず駅戸を定め、駅戸の中より駅長を定



わたしの昔話

める事より始まり、多くの定まり事があった。宿駅木屋瀬の人々は、こうした新しい定まり事に取り組み事になって一段と個々の交流も深まって来た。大路の宿駅には、駅馬と宿駅運営費に当てる為に、駅田四丁部が下付されていた。けれど駅田は耕作しての収益を待たねばならず、又農作業は駅戸の大きな労務負担にもなるために、駅戸には喜ばれず、駅田下付は長くは続かなかった。宿泊所や休息所や旅用品の取り揃え等々の他に、「駅宿」とをリレーして行う「駅伝制」も定められたので、町は日毎に活気を見せて来た。大化の改新の頃おひより、仏教をはじめ諸々が海外より渡って来るようになり、日本からも海外へ出るようになった。

こうした人達が日本に上陸する港、日本より船出する港は博多の那の津の港であり、立ち寄る所が福岡の「鴻臚館」であったので、宿駅木屋瀬の本通りは、こうした国際的な人々の交流する大通りとなり、加えて東は小倉、西は博多、南は飯塚と三方道路の分岐点でもあり、交通の要衝として脚光を浴びて来た。

人や馬を利用して旅人を送りし荷物を輸送し、通信連絡等々もあり、町に人に青空のような清々しい喜びが現れて来た。これが宿駅木屋瀬の、明日に賭ける夜明けの姿であった。

但しこの頃の人々の中には、全く周囲との交渉もなく、ただ自己本意の内潜在的暮らしか向きに甘んじた人もいたようであったが。

宿駅木屋瀬の日々の進歩は、こうした人達の心を開かせたのか、皆みんな、大空の下にいでて仲良く爽やかに汗し、無限の希望に向かうようになった。

本町 柴田由美子

「柴田豊廣遺稿集」おひより

伝統と地域の想いを今に受け継ぐ行事
令和3年12月4日(土)5日(日)、10名の児童による令和3年度「子供多びす頭」が須賀神社にて執り行われました。
はじめに、この行事の準備から本番まで地域の人をはじめ様々な方にご協力をいただき無事盛大に行事を執り行う事が出来ました事に、令和3年度子供多びす頭の保護者を代表致しまして深く感謝申し上げます。
この行事は木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒ある行事で、旧来は男の子が数え年で11歳(現在の小学校4年生)になると、地域の若衆(大人)の仲間入りをする儀式として行われたものです。現在は、毎年12月の第一土曜日と日曜日の2日間に渡って行われています。

子供多びす頭

世話人代表 永末 聖

では一生に一度の祝い事ですので必ず成功させるといふ決意を胸に、全ての行事を執り行いました次第でございます。

特に太鼓練習では、柳勝二氏をはじめ木屋瀬青年会の皆様、個人の皆様におかれましては約3週間平日夕方18時〜20時まで仕事の帰りに子供達のために尽力をいただいた事に感謝申し上げます。はじめは頼りなさそうに見えた子供達でしたが太鼓練習を重ねていくうちに段々と成長し、行事当日は成長した姿を披露する事ができました。

私が世話人として準備を進めていく中で一番感じた事は、皆様の地域と地域の子供達を想う心です。伝統行事と地域の関係は、歴史の積み重ねが大きいほど、行事が地域を結集して固め、逆に地域は行事を守り伝えようとする、相互作用が起きるのだと感じました。子供達にとってこの行事が、地域への関わりを考えるきっかけになってもらえればと考えています。来年以降もこの伝統ある行事が継承され、また子供達の笑顔が地域に繋がっていく事を祈念いたします。